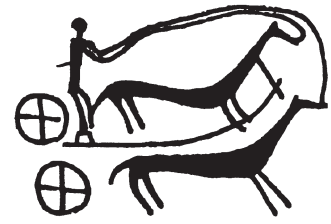


# センターニュース

Hokkaido University  
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター  
Newsletter No. 71



北大の英語教育への一提案 (3 ページ)

「広東語」初開講 (5 ページ)

FD 教育ワークショップを6月にも開催 (6 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

## 巻頭言 FOREWORD

### 大学教育を着実に進めるために

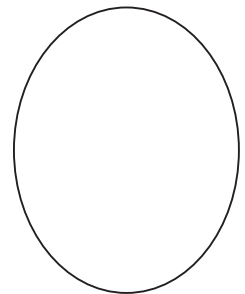
高等教育機能開発総合センター長 脇田 稔

大学教育の目的は、言うまでもなく優れた人材の養成にあります。優れた人材とは、それぞれの専門領域で社会に有用な知識と技術を身につけ、実践できる人物で、特に優れていることが条件となります。さらに、知識と技術のほかに、社会人としての規範、矜持、倫理、常識の感覚を身につけていることが必要となります。

知識と技術については、それぞれ専門領域で教育の長い伝統がありますが、後者を身につけようとするとき、教えてもらうことより、むしろ個人が自己学習・自己訓練を通して身につける部分も多いので

す。ですから、大学としては何を選択することが正しいことなのか、どのような範囲の概念の中でその感覚を探るかあるいは育てるかの判断基準を示しておくことが必要です。これが、理念あるいは目標とかわれ

るものです。学生には「本学の教育理念」として示されますが、「何のために」が意外と明瞭に示されていないことがあって判りにくい場合が多いようです。



## 大学の理念と全学教育

北大の教育理念はもちろん、「フロンティア精神」、「全人教育」、「国際性の涵養」、「実学の重視」です。

これを学生の側から見ると、これらの理念にあった事項を学ぶ目標となりますし、教員の側からは教育内容の選択、構成、実施に際して、これらの理念との整合性を考える規範となります。学生諸君にとってこれらは、学部での専門教育が本格的に始まる前にある程度身につけておくか、目標への方向付けをしておく必要があると思います。全学教育の存在する意義は実にここにあると思います。

同時に教養的知識賦与を目的とするリベラル・アーツとは若干意味が異なります。全学教育は、将来の専門教育に必要な基本的、あるいは入門的事柄を学ぶ機会であると同時に、このような人間形成の機会です。高校生から社会人に至る道の初めの部分です。したがってここを歩く人が方向を誤らないように、また円滑に歩けるように、躓いたり転んだりしないように十分整備されているべきであります。

学生は多様な個人の集団です。個人はそれぞれ異なる資質、能力、要求、希望、挑戦目標を持っています。これらの多様性を抱え込んで、彼らの期待しているように挑戦させ、発展、成長を援助することが、全学教育の大きな使命の一つであります。もちろんこれには、多くの問題があつて、理想的な教育の場を提供できるところまでいっていないことも事実です。大学は問題を一つ一つ解決してゆかなければなりません。一つの解は、全学教育とくに一般教育演習に、学生の要望に沿うような科目を精選して開講することです。学生諸君が、本学の理念と、個々人の夢と希望を重ね合わせたとき見えてくるものに邁進できるよう、教育内容と施設を整備してゆきたいと考えています。

## 入試改革

よい人材を養成するためには、良い素質を持った学生を選抜しなければなりません。そのためには、適切な入学試験を実施することが必要です。

北大は幸いにして、全国から学生が集う「全国区」の大学です。毎年1万名を超す受験生が全国から志願してくれます。このような状態は北大にとって誠に好ましいことで、今後も継続させたい事柄です。

しかし18才年齢の減少に直面している現在、座して待っているだけではいずれこの状態を維持できなくなることは明らかです。北大として来年のそして将来の大学受験生に、北大で学ぶことそして北海道で暮らすことの楽しさと意義を十分に全国の隅々まで知らせる必要があると考えています。この点で入試広報活動を積極的に行って行かなければなりません。

北大では、二次試験を前期、後期に分離し、募集定員を学部の判断で適宜分割して募集する方法をとっており、各学部ではAO入試の試験方法に工夫をし、募集人員の前後期分割を変更し、あるいは面接を導入したりなどしています。学部によっては、毎年教員が総掛かりで入試に対応するなど、入試には大きなエネルギーが費やされています

このところ、教育再生会議、経済財政諮問会議等、政府の審議機関から、さまざまな入試に関する要求あるいは要望が出されています。良いものもありますが、多くは無い物ねだりの感が無くもなく、現在の入試制度を無理なく転換できるものは少ないようです。一方、北大では、学部、学科、分野単位で募集選考するいわゆる縦割り入試を十年余り実施してきました。数年前からこれを見直すための検討が行われています。中間報告では、将来の専攻を入学時に決定しない入学選考、いわゆる「くくり入試」の導入の検討が提案されております。ともに、我が国の国立大学入試制度のあり方を根本から問う内容も含んでおり、将来にわたって十分な検討の必要があります。

## 大学院教育

北海道大学は大学院大学として我が国の基幹大学の一つです。先進的かつ高度な研究を行い学問の水準を高め、社会の発展に寄与しなければなりません。このためには、高い水準の研究を遂行し、またそれを継承して行く人材の養成が必要です。このため大学院の充実にも力を入れなければなりません。まず、大学院生、とくに就職等への不安もあつて進学率が伸びない博士(後期)課程を増やすことが必要です。この点を考慮して、キャリアセンターでは、就職支援を充実させてこれらの不安を取り除き、大学院進学率を上げようとするプログラムを実施中です。良い人材養成という面では、講義特に共通講義の検討も必要です。グローバル

COEの取得などによって、一部の研究科・学院単位の編成が近い将来変化することが予想されています。これに対応して教育体系にも改訂が必要となるので、検討を始めようとしているところです。

欧米の主だった大学は、大学院博士課程の学生に十分な経済支援を行い、学生が生活の心配なく研究に集中できる仕組みが整備されているところが多くあります。そのことが、十分な博士課程在籍数、研究水準の高さを維持している大きな要素となっており、同時に、海外から我が国の大学院への進学が少ない理由となっ

ています。全てお金で解決できる問題ではありません。すでに一部の研究科、学院では実施され評価されていますが、日本語での授業が是非とも必要な分野を除いて、できるだけ大学院では共通言語としての英語で授業を行うよう努力することも、留学生を増やす方策の一つとして検討に値します。これは、同時に日本人学生・教員双方にもよい刺激となるでしょう。

今後、教職員、学生の理解と協力を得ながら、全学挙げてこれらの問題に取り組んでゆきたいと思っております。

## 外国語教育 FOREIGN LANGUAGE TEACHING

# 北大の英語教育への一提案

地球環境科学研究院 教授 池田 元美

国際化と称してさまざまな英語教育が提唱され、いろいろな方法や規模で実施されています。低年齢では、生まれる前から胎内で英語を聞くものから日本語を話すと同時に英語も話せると宣伝する教材がありますし、小学校で英会話を取り入れる試みもあります。この現状の中で、第二次世界大戦直後に生まれ旧来の教育制度で育てられた私が、大学における教育に携わってきた経験に基づいて、英語教育の一形態を提案してみようと思います。

まず経歴から申し上げますことにします。博士課程修了までは標準年限で進んだものの、5年間は職がなく、米国などのポストドクターに応募して、ようやくシアトルの研究所に受け入れられました。それを起点に、最後はカナダの海洋研究所で働き、合計15年間の北米生活を終えました。北大に職を得て日本に戻ったのが13年前です。

英語に関する当時の大学教育の環境は現在と大きく異なっていました。今では外国人研究者が頻りに研究室を訪問するし、研究科単位では毎週といっていいほど英語のセミナーに参加できます。しかし、

私が博士課程に在学中、英語のセミナーを聞いたのは1回だけでした。その著名な流体力学研究者の話を聞くより、顔を見て「へー、あれがxxなんだ」と感じたのを覚えています。

英語の聞き取りや会話の力を向上させるには、個人の努力が求められていたのですが、私はあまり真面目ではありませんでした。シアトルに行けるとわかってから、ようやくテープで標準的な会話を聞いてみたくらいです。知り合いの友人であるアメリカ人と一度だけ英語で会話する機会をえました。そのとき「きみは大きな声で話すのがいいね」とほめられた勢いで、渡米したのです。3歳と1歳の息子を連れて。

北米ではESL (English as a Second Language) のクラスに参加したり、昼食やコーヒーの時間に仲間に入れてもらったりしながら、徐々に慣れていったと思います。カナダの海洋研究所ではポストドクターではなく、通常に雇用される研究員となったので、英語の問題点を言い訳にできない状況に置かれました。それでも中国からの研究者も多く、癖のある英

語でもなんとか仕事をこなすことができました。

さて、北大の現状を見てみましょう。少なくとも大学院生は英語でやりとりする多くの機会を持っています。外国人研究者が訪問するので、セミナーに参加したり、レセプションで世間話をすることもできます。国内で開かれる国際学会に参加するチャンスもあります。1ドルが360円の時代とは違い、外国の国際学会で発表する可能性も高くなっています。

2005年度に環境科学院が発足しました。それに合わせてカリキュラムも改革し、英語による研究発表をシステムティックに身につけるため、新たな講義を始めました。「国際コミュニケーション法特論」とその演習です。講師陣には私も含め、低温科学研究所のRalf Greve教授、および地球環境科学研究所の豊田准教授を配しています。Greve教授はドイツ人ですが、英語を用いたコミュニケーションの臨場感を伝えるためには必要な人材です。世界に開いた研究所を作り上げようとする低温研の人事に敬意を払う次第です。この講義では、研究論文を書き、結果を口頭やポスターで発表し、それに際して質問し、答えることを学びます。

最近の大学では英語学校の授業によって単位の一部を換えることができます。それは本来の大学教育としてふさわしいのでしょうか。大学であるなら、もっと学究に関わりながら英語を学ぶ機会を提供すべきでしょう。私は北大の英語教育に、大学ならではの要素を作り上げることを提案したいと思います。外国人研究者の訪問を利用して、彼らの研究発表を聞くことから始め、セミナー後の交流で訪問者と研究観や生い立ちを話し合います。学生は自分の研究

発表をし、それを訪問者に聞いてもらいます。外国人研究者もさまざまですが、教育を通じた学生との交流に意義を見出す人も多いと思われます。もちろん、その努力にふさわしいお礼をすべきです。現在でもこのような設定は指導教員が作っているに違いありません。しかし、それはあくまでも個人的な奉仕であり、大学としての取り組みではありません。組織として制度設計をすることを求めているのです。

私の経験から、学生の印象はこのようなようです。日本人学生は引っ込み思案で、コミュニケーション技術を身につけることにあまり積極的ではありません。私の時代にくらべれば英語に接する機会が多いものの、決して発表がうまいとは言えません。「国際コミュニケーション法特論」にも、もっと博士後期課程に進学する学生が参加すべきです。外国人留学生が昔よりずっと多いのですから、彼らと仲良くなれば、言葉だけでなく外国の考えや見識に触れられます。外国語は経験を積みばうまくなるのですから、教育する側としてはシステムを作る責任があります。経験をシステムティックに積み上げられるカリキュラムのひとつとして、上にあげた要素は有効だと考えます。

日本人学生に積極性を求めているのですが、それは日本人の多数派の性格に問題があると考える人がいるかもしれません。では日本人の性格を変えるべきなのでしょうか。私の意見は、そこに論点を押し込めるのではなく、自らを磨くため積極的に話しかける努力を促すことです。その方が日本人らしくないでしょうか。

**Don't be shy, whenever you have a chance.**



# 「広東語」初開講

メディア・コミュニケーション研究院 准教授 飯田 真紀

平成18年度から開講になった全学教育・外国語特別演習(広東語)の紹介と報告を行います。

## 広東語開講の意義

現在、全学教育科目の外国語科目及び外国語演習で開講されている中国語の授業では、北京語をベースとした標準中国語が教えられています。しかし、中国語にはそのほかにも互いに意思疎通が困難で使用人口も多い多種多様な方言があります。ここでご紹介する広東語は、広州や香港などで日常的に話されている方言ですが、北京語がわかる人が聞いてもまるで外国語のように理解不可能なものです。

香港では中国に返還された今でも日常生活、教育、ビジネス、公共機関といったあらゆる場面で使用されています。そのほか海外の華人社会においても北京語のほかでは最も優勢な中国語方言であることから、全世界でおよそ8,000万人の話し手を持つという統計もあります。また、香港では北海道旅行の人气が高く、道内の観光地では広東語を耳にする機会が非常に多くなっています。そうした背景の下、開学以来初めてとなる広東語の授業が設けられました。

## 授業風景

授業は第一週目は広東語の概説と香港の言語事情について簡単な講義を行います。広東語をはじめ中国語の方言は基本的に話し聞くための言葉で、広東語話者であっても読み書きには標準中国語を用います。しかし、このような規範的な書き言葉とは別に、広東語を話す地域では話し言葉の広東語をそのまま漢字で書く習慣も古くからあり、非規範的な文章でしばしば使われます。そのような書き言葉と話し言葉との関係や、英語と中国語を共に公用語とする香港社会の複雑な言語事情について概説を行います。概説が済んだ後、二週目、三週目で発音及び簡単な挨拶ことばを学習し、それ以降では教科書に基づいて旅行や日常生活で使われる会話を素材に、単語や文の組み立て方を学習します。

授業では毎回ネイティブスピーカーの協力により、会話や発音の効果的学習や、広東語に関する様々な話題の提供が可能になっています。また、広東語で制作された香港映画やポップス、香港を紹介した映像を適宜教材に用いることで、受講者の学習意欲を高める工夫を行っています。そのほか、授業外での自習用教材として、広東語映画の映像資料を附属図書館北分館に多数配架されるよう、現在資料の拡充に努めています。

## 受講生の背景

広東語は北大では初めての開講ということで、なるべく多くの受講生に来てもらえるよう、事前にポスターやビラを作成し、周知に努めました。その甲斐あってか、18年度2学期は履修生と聴講生を合わせ、最も多い時で25人の学生が受講しました。受講生の背景として目だったのは、外国語科目の中国語を履修済みの学生や中国語を母語とする留学生のように、中国語の基礎がある学生が多かったことです。中国語履修済みの学生にとっては、中国語の方言である広東語は比較的親しみやすく、また学びやすい科目として捉えられていたようです。一方、中国語を母語とする留学生の受講は、香港の映画やポップスなどの大衆文化の人气や、香港・広州一帯の経済力を背景にした広東語の地域共通語としての威信によるところが大きかったようです。

## 今後の課題

広東語は本来は話し聞くための言葉なのですが、学期末には到達度を測るために筆記試験を行いました。その際、発音が正しく記憶できているかを見るために発音記号を記入させる問題も出題しましたが、全体的に出来はよくありませんでした。しかし、実際に発音させてみるとよく出来る場合が多く、本来話し言葉である広東語の到達度確認には多様な尺度を導入する必要があると感じました。

## 単位の実質化を目指して — FD 教育ワークショップを6月にも開催 —

高等教育開発研究委員会「FD 戦略ワーキンググループ」の提案に沿って、平成 19 年度から、1 泊 2 日の「北海道大学教育ワークショップ」が6月と11月の2回行われることになり、その第1回目が6月8日（金）から9日（土）にかけて行われました。このワークショップの対象は原則として着任5年以内の助教以上の教員で、学内の各部局から総勢39名の受講者が集まりました。

今回のテーマとしては「単位の実質化」をとりあげています。平成 18 年度から始まった全学教育の「履修登録単位数の上限設定」および「GPA 制度」の本格利用を真に意義のあるものにするためには、「単位の実質化」（すなわち1単位は45時間の学習に対応するという原則の実質化）の方向に授業の組み立て

を工夫することが必要になります。このワークショップのメインの部分では、参加者が小グループに分かれ、予め指定された型の授業を設計することにより教育に関する基礎を学習するわけですが、その授業設計の際に単位の実質化を何らかの意味で実現する方向の工夫をするということを目指します。

1日目の6月8日は、遅刻者もなく予定通り学術交流会館前から研修会場の奈井江温泉行きのバスが出発し、高速道路にのってから参加者の自己紹介で研修が和やかな雰囲気ですスタートしました。表1のプログラムのように、会場到着後総長と一緒に記念写真を取り、総長の挨拶ののち、ミニ講義「FDの目的と意義」、「GPA と単位の上限設定について」があつて昼食になりました。

表 1. 第 10 回 北海道大学教育ワークショップ プログラム

2007年6月8日(金)		型授業の例」(30分)	
8:30	学術交流会館1階ロビー集合・受付	16:50	グループ作業 II の課題の説明・グループ学習室への移動(10分)
8:45	バス 出発	17:00	グループ作業 II 「授業の設計2:(目標の手直しと)方略」(60分)
	研修開始:オリエンテーション	18:00	発表・全体討論(50分)
9:55	ないえ温泉「ホテル北乃湯」到着 玄関前で総長と記念写真	18:50	夕食(40分)
10:00	挨拶「FD実施にあたって」(20分) (佐伯総長)	19:30	休憩(風呂など)(50分)
10:25	ミニレクチャー「FDの目的と意義」 (25分+質問5分)	20:20	懇親会
10:55	休憩(15分)	2007年6月9日(土)	
11:10	ミニレクチャー「GPAと単位の上限設定 について」(40分+質問5分)	7:30	朝食
12:00	昼食 60分	8:30	ミニレクチャー「評価」(30分)
13:00	研修のオリエンテーション「ワークショップとは」・アイスブレイキング(30分)	9:00	グループ作業 III の課題の説明・グループ学習室への移動(10分)
13:30	ミニレクチャー「カリキュラムの構成要素とシラバス」「学習目標」(30分)	9:10	グループ作業 III 「授業の設計3:(方略の手直しと)評価」(60分)
14:00	グループ作業 I の課題の説明・グループ学習室への移動(10分)	10:10	発表・全体討論(50分) -休憩(10分)-
14:10	グループ作業 I 「授業の設計1:科目名・目標の設定」(60分)	11:10	参加者の個人的感想や意見(50分)
15:10	発表・全体討論(50分)	12:00	昼食(60分)
16:00	休憩(20分)	13:00	バス出発
16:20	ミニレクチャー「教育方略」「学生参加	14:30	J R札幌駅北口到着

昼食後、研修のオリエンテーションとアイスブレイキングを行いました。その後、研修の中心内容である新しいシラバスを作成するための3回のセッションのうちの第1番目の「目標」に入りました。各セッションは30分のミニ講義とグループ学習、全体発表からなっています。休憩を挟んでから第2セッション「教育方略」を行い、終了後夕食、休憩を挟んで懇親会となり1日目が終わりました。

2日目の6月9日は、第3セッション「評価」を行って5科目のシラバスが完成し、研修のメインの部分は終了しました。研修室を元通りにした後、参加者の個人的感想や意見の発表を行いました。途中ゆっくり昼食を取った後、帰りのバスの中で「感想」の続きを行い、札幌駅北口で解散となりました。

例年と同じようにアンケートをとりました。来年度の「高等教育ジャーナル」に詳しい報告をのせる予定です。

各グループの作成したシラバスから、科目名、一般目標および行動目標を紹介します。

## A グループ

科目名：一般教育演習「世界の食について考える

—生産・分配・文化・健康の視点から—

<一般目標>

私たちは、毎日の「食べ物」あるいは「食べるという営み」について実はあまりよく知らないでいる。そうした自覚を念頭に、農学、経済学、宗教文化、医学、薬学などの観点から「食」について学際的な知識

を獲得し、同時に現状に対する建設的意見を持つことができるようにする。

<行動目標>

- (1) 文献や情報の“収集法”を身につける。
- (2) 「持続可能な食糧生産」がどのようなことであるか説明ができる。
- (3) 「食糧分配・食の平等」がどのようなことであるか説明ができる。
- (4) 「食物と宗教・文化」がどのようなことであるか説明ができる。
- (5) 「薬と薬品」がどのようなことであるか説明ができる。
- (6) Power Point を用いたプレゼンテーションを行うことができる。
- (7) 他者の報告・発表を建設的に評価を行うことができる。
- (8) レポート作成法を身につける。

## B グループ

科目名：一般教育演習「バイオエタノールは本当に環境にやさしいのか」

<一般目標>

環境保護だけで人間社会は成り立つのか？ 車を例に多面的に考える。

<行動目標>

- (1) 現在の状況を理解する。
- (2) 環境保護の大切さと利便性の喪失を比較検討し、議論する力をやしなう。



(3) 現場を体験する。

## C グループ

科目名：一般教育演習「北大キャンパスにうごめく  
命 (ムシからヒトまで)」

<一般目標>

北大のキャンパスは日本一豊かな自然環境に恵まれている。われわれをとりまく身近な生き物の種類や生態(生きざま)を取り上げ、生活環境・文化・歴史を学び、北大の理念にふさわしい世界観を身につける。

<行動目標>

- (1) 自ら取材した北大キャンパスの植物・昆虫の名前が言えるようになる。(ex. 生物多様性の理解)
- (2) 自ら情報収集する能力を身につける(対人, 文献, フィールド)。収集した情報を分析し, 取捨選択する能力を身につける。
- (3) 学外者に北大キャンパスの自然の魅力を伝えることができる(プレゼンテーション能力)。

## D グループ

科目名：特別講義「学問とは何か～その相互関連と  
社会でのつながり」

<一般目標>

一見無関係に見える学問領域の間にも実は深い関連性がある。また, 学問と応用を切り離して考える

ことは出来ない。現在, 人類が直面する様々な問題を解決するためにも多面的な視点が必要である。この特別講義では各学問領域の内容を知るだけでなく, 学問領域の相互関係や社会とのつながりを知る。

<行動目標>

- (1) 学問領域間の相互関係を事例を基にして理解し, 自身の学問領域について考察できる。
- (2) 学問と社会との関係を事例を基にして理解し, 自身の学問領域について社会に与える影響を考察できる。

## E グループ

科目名：総合科目(環境と人間)「環境問題を見つめ  
直す」

<一般目標>

人間は様々な活動を通じて, 自然環境を自分達の都合のよいように作りかえてきた。その結果, たとえば地球温暖化や環境汚染などの環境破壊が進み, われわれの生活をおびやかしている。この講義では, 「環境問題」といわれているものの実体を改めて確認するとともに, 持続可能な社会システムの構築に向けた幅広い視点をやしなう。

<行動目標>

- (1) 環境問題の現状を理解する。
- (2) 取り組みの背景と内容を理解する。
- (3) 自分の意見をもつ。

## 高等教育 HIGHER EDUCATION

### 特任准教授に崔先生が着任

韓国サンジ(尚志)大学のCHOI Donmin (崔燉■)先生が、特任准教授として6月23日～8月25日の予定で来日されました。同准教授は、さらに来年1月16日から一ヶ月間滞在されます。

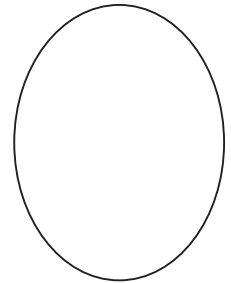
崔先生の主な研究領域は、大学生涯教育、大学改革、生涯教育政策、社会変化と教育などで、著書には「生涯教育学：動向と課題」、「各国の生涯教育政策」、「教育と人的資源開発」、「生涯学習：知識強国としての第一歩」、「人的資源の拡充と保護」(以上共著)等があります。

崔先生は、ソウルにあるハンヤン(漢陽)大学および同大学院(教育学博士)を卒業後、政府研究機関である「韓国教育開発院(KEDI)」研究委員、「平生教育法」によって設置された「国立平生教育(日本の生涯教育を意味する)センター」長、大学単位履修制である国立の「単位銀行制(credit bank)」の責任者を務めてこられました。その間、大統領諮

問「教育人的資源政策委員会」専門委員、「韓国平生教育学会」副会長、「韓国平生教育総連合会」事務総長などを歴任されています。

現在、サンジ(尚志)大学准教授として、産学協力団事業推進本部長を受け持っています。対外活動では、大統領「教育革新委員会」専門委員、教育人的資源部政策諮問委員、「東アジア平生教育フォーラム」副会長、「韓国平生教育教授協議会」共同代表、軍人的資源開発委員、「韓国比較教育学会」学術誌編集委員などを担当しておられます。

滞在中に数回の講演会を予定していますので、興味のある方は、ぜひご参加ください。



## 生涯学習 LIFELONG LEARNING

### 「キャリアデザイン」開講

#### —高い志をもつ学生の育成を目指して—

入学後のできるだけ早期から「学ぶこと」と同時に「働くこと」の意義を十分考えさせ、高い志をもつ学生に育てることを目的として、特別講義「キャリアデザイン」を全学教育科目として実施しています(表2)。今年度は83名の学生が受講し、積極的に取り組んでいます。今年度も各界を代表する学外講師による講義やグループディスカッション及び自己分析なども含まれており、全国的にみても新しい

タイプのキャリア教育科目として注目されています。

特に、今年度は、小林いずみメリルリンチ証券株式会社代表取締役社長(経済同友会副代表幹事)など各界を代表する計5名の外部講師をお招きし、熱のこもった講義をしていただきました。また、受講生はこの外部講師の講義などをもとに、グループディスカッション等を通じて学生が自らのキャリアデザインを行っています。

表 2. 平成 19 年度キャリアデザイン授業日程

① 4月12日(木) オリエンテーション	⑧ 6月14日(木) 外部講師Ⅳ:土屋 公三 株式会社土屋ホーム 代表取締役会長 「社会で成功する人間像とは」
② 4月19日(木) キャリア概論Ⅰ (生涯学習計画研究部亀野准教授)	⑨ 6月21日(木) グループディスカッションⅡ 自己分析“nEQ アセスメント”の実施
③ 4月26日(木) キャリア概論Ⅱ (キャリアセンター・工藤昌行センター長)	⑩ 6月28日(木) 外部講師Ⅴ:小林 いずみ メリルリンチ 日本証券株式会社 代表取締役社長(経済同友会副代表幹事)「未知の世界へ」
④ 5月10日(木) 外部講師Ⅰ:岡田 実 北海道新聞社 取締役 経営企画室長「真実の海を泳ぐ」	⑪ 7月5日(木) グループディスカッションⅢ
⑤ 5月17日(木) 外部講師Ⅱ:平地 聡 インベンシス株式会社 代表取締役 「学生時代の友人と卒業 20 年後のリレーション(人脈)について」	⑫ 7月12日(木) グループディスカッションⅣ
⑥ 5月24日(木) グループディスカッションⅠ	⑬ 7月19日(木) グループ発表
⑦ 5月31日(木) 外部講師Ⅲ:林 由紀 独立行政法人 国際協力機構 札幌国際センター 業務第1チーム主任 「ベトナムにおける国際協力の経験を通じて」	⑭ 7月26日(木) 全体発表 全体のまとめ

写真 7. 講演をするメリルリンチ日本証券(株)小林社長

写真 8. グループディスカッションをする学生

## 入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

### 高大連携授業の報告書 — 3年間の試行の報告と全学的な検討へ —

2003年4月に発足した「高大連携科目に関する研究会」(入学者選抜研究部・生涯学習研究部と札幌旭丘高等学校との共同プロジェクト)は、2004年度から3年にわたり高校生による全学教育科目の試行的聴講を実施し、教養教育を活用した高大連携の在り

方について検討してきました。各年度の実施状況については、センターニュースでお知らせしていましたが、このたび3回の試行結果をまとめ、7月27日開催の高等教育機能開発総合センター運営会議に報告されました(『平成16年度～平成18年度高校生

による全学教育科目の試行的聴講：成果と今後のあり方—教養教育を活用した高大連携の可能性』)。この報告をうけ、教育改革室に「高大連携の今後に関する検討WG」(仮称)が設けられ、全学的な視点から本学における高大連携に関する検討が行われることになりました。

過去3回の試行的聴講は、科目担当の先生方の多

大なご協力によって実施することができました。授業を担当された先生方、高校生と同席した北大生に感謝いたします。今年度第2学期においても、昨年に引き続き複数の高校の生徒の参加による試行を実施する予定です。先生方のご助言とご協力をお願い申し上げます。

## センター日誌

CENTER EVENTS, April - June

### 4月

- 17日 ・(会議) AO入試部会
- 19日 ・(訪問) 香川県三木高校
- 23日 ・(会議) 全学教育実施体制運用の在り方検討WG
- 25日 ・(会議) 平成19年度第1回予算・施設委員会  
(持ち回り)
- ・(訪問) 八雲高校
- 26日 ・(会議) 平成19年度第1回教育改革室会議
- 27日 ・(会議) 第68回全学教育委員会
- ・(訪問) 滝川高校

### 5月

- 2日 ・(訪問) 旭川大学高校
- 10日 ・(訪問) 茨城県茗溪学園高校
- 11日 ・(訪問) 愛媛県松山北高校
- 16日 ・(会議) 入学者選抜委員会
- 18日 ・(説明会) 2007進学ガイダンス(札幌)
- 22日 ・(訪問) 岐阜県多治見高校
- ・(会議) 北海道進学コンソーシアム実施委員会
- 25日 ・センターニュース第70号発行
- 28日 ・(会議) AO入試部会
- 29日 ・(会議) 第44回教務委員会
- 31日 ・(会議) 全学教育委員会小委員会
- ・(会議) 平成19年度第2回教育改革室会議

### 6月

- 4日 ・(会議) 第40回生涯学習計画研究委員会
- 5日 ・(訪問) 白樺学園高校
- 7日 ・(訪問) 大阪府関西福祉大学高校
- 8~9日
- ・(行事) 第10回教育ワークショップ
- 12日 ・(訪問) 石川県飯田高校
- 13日 ・(訪問) 奈良県奈良北高校, 青森県青森高校
- 14日 ・(訪問) 土幌高校, 大樹高校, 岩手県福岡高校, 愛知県南山高校
- 15日 ・(訪問) 兵庫県香住高校
- 18日 ・(訪問) 青森県木造高校
- 20日 ・(会議) 第31回共通授業検討専門委員会
- ・(訪問) 岐阜県多治見北高校, 東京都成立学園高校
- 21日 ・(訪問) 岡山県倉敷古城池高校, 石川県羽咋高校, とわの森三愛高校
- 22日 ・(会議) 学部・大学院教育検討WG
- ・(会議) 成績評価結果検討専門部会
- ・(訪問) 岐阜県多治見北高校, 京都府立園部高校
- ・(説明会) 美幌高校進学説明会(美幌)
- ・平成20年度AO入試・帰国子女特別選抜学生募集要項公表
- 25日 ・(会議) センター長補佐会
- ・(会議) AO入試部会
- ・(訪問) 札幌創成高校
- 26日 ・(説明会) オール進学説明会(札幌)
- 28日 ・(会議) 平成19年度第3回教育改革室会議
- ・(訪問) 三重県桑名高校, 青森県青森北高校
- 29日 ・(訪問) 栃木県作新学院高校

## 行事予定 SCHEDULE, August - March

【日(曜日)】	【行事】	【備考】
8月13(月)～15(水)	追試験	
13(月)～9月28(金)	夏季休業日	
15(水)	成績報告締切(非常勤〔帳票〕)	
23(木)正午	成績報告締切(常勤〔Web入力〕)	
9月中旬～下旬	進級判定及び学科等分属手続	当該学部
28(金)	一年次学修簿配布日	
10月 1(月)	第2学期授業開始	
1(月)～2(火)	抽選科目の申込期間	
9(火)	抽選科目の結果発表日及び追加申込日	
10(水)～16(火)	平成18～19年度入学者履修届 Web入力	
10(水)～11(木)	17年度以前入学者履修届受付	
11月		
12月25(火)～1月4(金)	冬季休業日	
1月7(月)	授業再開	
19(土)～20(日)	大学入試センター試験【18(金)休講】	
22(火)～23(水)及び 29(火)～30(水)	補講日	
24(木)	金曜日の授業を行う日	
28(月)	第2学期授業終了	
31(木)～2月13(水)	定期試験	
2月14(木)～18(月)	追試験	
15(金)	成績報告締切(非常勤〔帳票〕)	
19(火)正午	成績報告締切(常勤〔Web入力〕)	
25(月)	北海道大学第2次入学試験(前期日程)	
3月12(水)	北海道大学第2次入学試験(後期日程)	
中旬～下旬	学科等分属手続	当該学部



## センターニュース 2007, No. 71 目次

＜巻頭言＞大学教育を着実に進めるために 脇田 稔……………1	「キャリアデザイン」開講 —高い志をもつ学生の育成を目指して—……………10
北大の英語教育への一提案 池田 元美……………3	高大連携の報告書 —3年間の試行の報告書と全学的な検討—……………11
「広東語」初開講 飯田 真紀……………5	センター日誌……………12
単位の実質化を目指して —FD教育ワークショップを6月にも開催— ……………6	行事予定……………13
特任准教授に崔先生が着任……………10	目次・編集後記……………14

訂正：No.69の4ページに掲載しました行事予定中1月24日、28日の項目に誤りがありました。正しくは、24(木)が金曜日の授業を行う日、28(月)が第2学期授業終了でした。お詫びして訂正いたします。

## 編集後記

PISA2006(国際学力調査のひとつ)が12月4日に、世界同時発表されました。PISA2003の発表時には、学力低下論争が巻き起こしたことは記憶に新しいところです。

2006の試験のために、アジアのある国では入念に準備したと聞いています。様々な思惑のなかで、別の国際学力調査の蓋が間もなく開きます。望むのは、その数字に一喜一憂しないことです。今の日本の教育に何が必要なのか、そのグランドデザインをしっかりと描く努力を期待したいと思います。接点での議論は、戦略があつて初めて意味を持つからです。(うさぎ)

## センターニュース 第71号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2007年7月25日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター  
〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目  
電話(011)716-2111・FAX(011)706-7854

編集委員：西森敏之・◎細川敏幸・木村純・町井輝久  
安藤厚・川初清典・亀野淳・山岸みどり  
鈴木誠・池田文人

ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで  
電話：(011)706-7514; FAX(011)706-7521

インターネット ホームページ：

<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center>